

# 半導体漫遊記

## 湯之上隆

(378)

米インテルが深刻な苦境に陥っている。かつて半導体売上高で世界首位を誇っていた同社は、2025年第2四半期には米NVIDIA、TSMC、サムスン電子、米ブロードコム、SKハインリックスに抜かれ6位へと転落した。さらに24年の売上高は21年の約60%にまで減少し、最終損益は18億ドルの赤字を計上した。

インテル不振の最大の要因は、長年の基幹事業であるプロセッサ(CPU)の市場シェアをライバルのAMDに奪われたことである。ファウンドリ事業の低迷もあるが、それ以上にプロセッサ分野での劣勢が業績を直撃している。

まずデスクトップPC向けプロセッサでは、21年第1四半期にインテルはAMDに追いつかれた。その後、一時は再びリードを奪い返したものの、24年第4四半

期に再び並ばれ、25年に入るとAMDに逆転を許した。

次にサーバー向けプロセッサは、20年までインテルが96%以上のシェアを独占していたが、21年第1四半期以降に急落し、25年第3

急落し、21年第4四半期には約70%にまで落ち込んだ。一方、AMDは20%超へと伸長した。ただし、その後はインテルが持ち直し、現在も70%超を維持しており、AMDとの差は約50%に開いている。すなわちデスクトップでは逆転され、サーバーでは激しく追い上げられている一方で、ノートPCだけはインテルが優位を保っている状況だ。

半期以降、製造委託先を米グローバルファウンドリーズ(GF)からTSMCへと切り替えたことが大きな転機となった。GFは12nm以降の微細化を断念したが、TSMCは10nm、7nm、5nm、3nmと先端プロセスを推進し、その最先端プロセスでAMD用のプロセッサが製造されるようになった。

一方、自社生産に固執したインテルは16年に14nm

価格差が生じた。この差がデスクトップ、サーバー、ノートPCの各分野におけるシェアの逆転や縮小をもたらし、インテルの低迷とAMDの躍進につながったと言える。(微細加工研究所・所長)

# プロセッサ市場の主役交代

## AMD快進撃、インテル苦境

四半期には62%まで低下した。これに対しAMDは同時期に37.7%までシェアを伸ばし、このAMDの勢いが続けば26年中にはサーバー向けでトップシェアを奪う可能性がある。

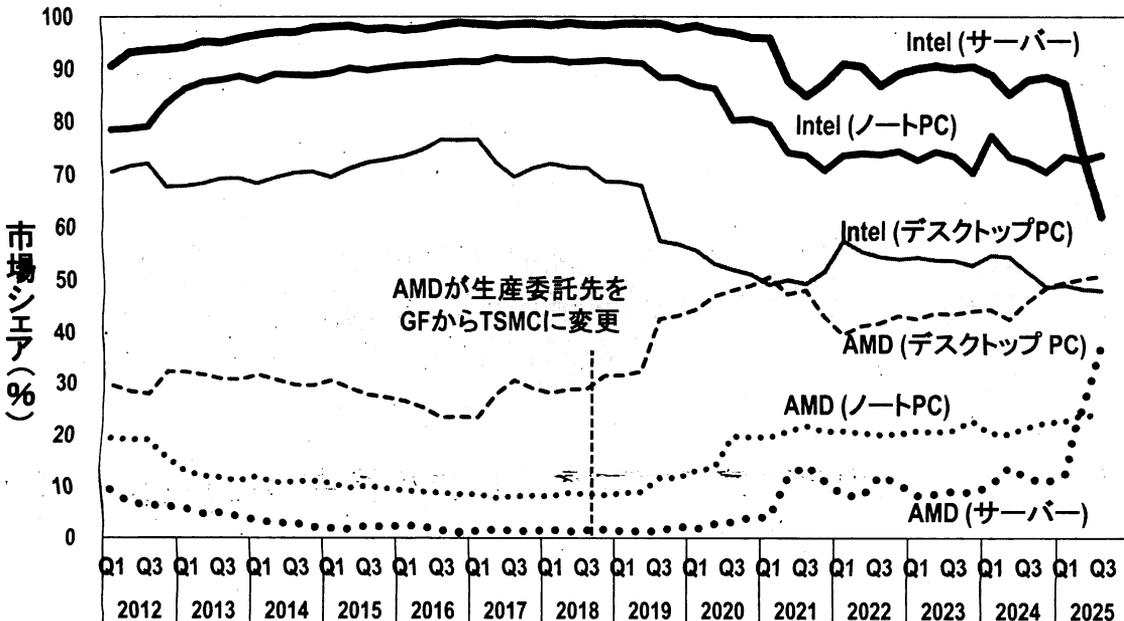
最後にノートPC向けでは、19年第2四半期まではインテルが90%以上のシェアを握っていた。しかし同年第3四半期以降シェアは

ではなぜインテルがプロセッサ市場で劣勢に立たされたのか。その理由のひとつはインテルが設計から製造までを自社で行う「垂直統合型」を維持しているのに対し、AMDは設計に特化したファブレスへ転換し、製造は外部のファウンドリに委託している点にある。

特にAMDが18年第3四

から10nmへの移行に失敗し、その状態が5年以上も続いた。さらにTSMCの755nm世代に相当する「Intel14」や「Intel13」の立ち上げにも苦戦している。

このような結果、TSMCの先端プロセスを活用するAMDと、先端プロセスの立ち上げに苦勞するインテルとの間には大きな技術



IntelとAMDの各種CPUの市場シェア(～2025年Q3)

(C) 2025 Takashi Yunogami

出所: PASMAR, [https://www.cpubenchmark.net/market\\_share.html](https://www.cpubenchmark.net/market_share.html)のデータを基に筆者作成